

守り、伝え、共に生きる (主な人権課題:アイヌの人々)

アイヌの人々は独自の文化をもち、自然と共生しつつ長い歴史を歩んできた北海道の先住民族です。アイヌの人々と和人^{*1}とのかかわりや歴史を踏まえ、アイヌの文化の特徴を学び、互いの人間としての尊厳や個性、文化の多様性を認め合い共生するために必要なことを考えてみましょう。

(^{*1} 右ページ「キーワード」参照)

- 北海道平取町^{びらとり}に住む高校3年生織田瑞希^{おだみずき}さんに関する文章を読み、自他の文化の尊重について考えてみましょう。

織田さんが生まれ育った平取町は、アイヌの人々が多く住み、アイヌ文化が深く息づいた町です。しかし、そんな平取町でもアイヌの独自の言語、アイヌ語を話せる人は、ほとんどいないのが現状です。

背景にあるのは、明治政府が進めた同化政策です。アイヌの人たちは、法律で「旧土人^{*2}」と位置づけられ、学校では日本語での教育が強制されました。アイヌの人たちへの差別意識も強まり、いまでも、アイヌであることを隠さざるを得ない人たちは少なくないと指摘されています。

織田さんにも自分がアイヌであることを言えない時期がありました。6歳のころから地元のアイヌ語教室でアイヌ語を学び、当初は、自分がアイヌであることに恥ずかしさを感じることはありませんでした。しかし、小学5年生の時に引っ越しとともに町内の別の小学校に転校。まわりにアイヌ語教室に通っている子は1人もおらず、周囲にアイヌであると明らかにすることに、初めて抵抗を感じました。

「アイヌであることが言えずに、ビクビクしていました」(織田瑞希さん)

アイヌだと言われることが恥ずかしいと感じ、友だちにもアイヌであることはなかなか言えずに過ごしていました。

織田さんの母の久美子さんも自らがアイヌと打ち明けることができなかった時期が長年、続

いていました。まわりからアイヌだと言われるのが嫌になり、平取町を出て東京で働いていた時期もありました。

久美子さんの祖母や曾祖母は、アイヌ語を話すことができましたが、教わったことはなかったといいます。「アイヌであることを隠したい」という意識がアイヌ語の伝承を阻んでいたのです。

(中略)

織田瑞希さんに転機が訪れたのは、中学1年生のとき。海外の先住民族との交流事業で訪れたニュージーランドでのマオリとの出会いでした。目にしたのは、ハカ。その踊りに圧倒的な迫力と民族としての一体感、そして「誰にも負けない」という気持ちを感じたといいます。気づけば涙を流していました。

「マオリのひとたちが誇りをもって披露していた。私もアイヌであることを隠さなくてもいいのかな、アイヌも胸を張って歌や踊りができたらいいな」(織田瑞希さん)

その後も、町の事業でニュージーランドを訪れたり、平取町にマオリの人たちが留学でやってきたりと交流は続きました。そのなかで、織田さんは大きな夢をもつようになりました。「アイヌの学校をつくる」という夢です。アイヌ語の伝承が、自分たちの世代で途絶えてしまうのではないかと、自分の好きなアイヌ語を消滅させたくないという思いが強くなっていきました。

(出典:NHK オンライン「アイヌの高校生が見たマオリのまち」(<https://www.nhk.or.jp/hokkaido/>、令和2(2020)年3月24日)より)

^{*2} 明治政府は、北海道開拓の過程でアイヌ民族を日本の国民として組み込み、「旧土人」と呼んだ。アイヌ民族の農耕民化と和人への同化のために、明治 32(1899)年に、北海道旧土人保護法が制定され、平成9(1997)年まで続いた。

○ アイヌ民族の文化・生活

(1) アイヌ語

- 身近なアイヌ語: ラッコ、トナカイ、コンブ、サッポロ
- あいさつ: イランカラプテ(こんにちは) イヤイライケレ(ありがとう)

(2) 工芸: アイヌ文様を施した衣服や彫刻などがあります。

(3) 信仰: 身のまわりや自然にある多くのものを「カムイ(神)」としてうやまいました。

(4) ウポポイ(民族共生象徴空間)

アイヌ文化を復興・発展させるため、白老町に開設された国立施設。アイヌ文化の伝承や人材育成に取り組むとともに、先住民族の尊厳を尊重し、多様な文化が共生する社会を築いていくための象徴として位置づけられています。



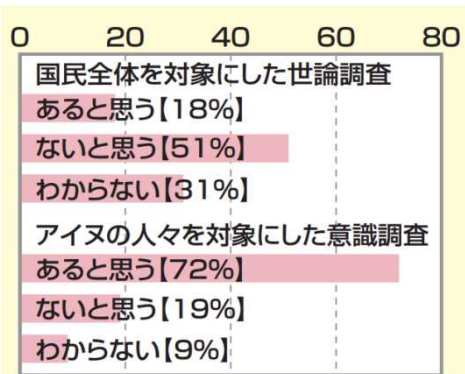
「ルウンベ(衣服(木綿))」
装飾の様子は地域によって異なる。

(出典: (公財)アイヌ民族文化財)



○ アイヌの人々に対する差別や偏見について

「現在、アイヌの人々に対する差別や偏見があると思うか」



「どのような場面でどのような差別を受けたか」

- アイヌであることが分かたら無視され、アイヌの子と遊んじゃいけないと仲間外れにされた。
- 雇用の際にアイヌであることを理由に雇用を見送られた。
- 姑(しゅうとめ)に家柄・出自の違いを指摘され、さげすまれた。

(出典: 内閣官房・内閣府「国民のアイヌに対する理解度に関する調査」、平成 28(2016)年)

考えてみよう

Q1. 瑞希さんが、アイヌであることが言えずに、ビクビクしていたのはなぜか考えてみよう。

Q2. ニュージーランドのマオリの人たちの権利に関する歴史的経緯や取組を調べ、アイヌの人々との共通点や違いをまとめてみよう。

○ キーワード

◆ アイヌと和人

「アイヌ」とはアイヌ語で「人間」の意味。かつて差別的に使われていたこともあり、アイヌの人々をさす言葉としては、「アイヌの人々」や「アイヌ民族」を使う。

「和人」とは、明治以前においては、本州から渡来してきた人たちをいい、現在は、日本の中で一番人数の多い人たちを、アイヌの人たちと並べて呼ぶときの呼び名である。アイヌ語では「隣人」を意味する「シサム」という。

◆ アイヌ同化政策

19 世紀半ばごろから明治政府によって実施された、アイヌ民族に和人と同じ生活様式を強いた政策。学校でも日本語での教育が行われ、アイヌ語は学校で禁止され、家庭でも伝承されず衰退していった。和人によるアイヌ民族へ偏見や差別も強まり、アイヌ文化は深刻な打撃を受けた。

◆ アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律(アイヌ施策推進法、令和元(2019)年)

文化振興に特化したアイヌ文化振興法(平成9(1997)年)に代わり施行された法律。アイヌ民族を「先住民族」と初めて明記し、先住民族の権利への配慮や民族共生象徴空間(ウポポイ)による地域振興、文化復興を目的としている。

○ 関係機関・施設等

◆ (公財)アイヌ民族文化財団

◇ 先住民族の権利に関する国際連合宣言(平成19(2007)年国連採択)

先住民族について、「植民地化とその土地、領域および資源の奪取の結果、歴史的な不正義に苦しんできた」とし、先住民族の制度、文化、伝統、固有の生活様式を守る権利のほか、政治的地位や経済的・社会的・文化的発展についての自己決定権を強調しています。また、先住民族に対する差別を禁止しています。